現代の感性が生み出す寺院建築と銅の新しい魅力

久成寺（くじょうじ）

美しくモダンな佇まいに驚き、思わず見上げてしまう。横浜駅からほど近い住宅街。このほど建て替えで新築された「久成寺（くじょうじ）」には、屋根や本堂などに銅がふんだんに取り入れられている。伝統的な銅の美しさと新しい感性の融合は、寺院建築に新たな表情を与えている。

現代的なデザインと調和する銅屋根

相模鉄道本線・平沼橋駅からすぐ近く。横浜駅から徒歩でも十二、三分という好立地に久成寺はある。明治二十五年に同地に開かれた日蓮宗の寺院で、建物の老朽化などからこのほど全面的な建て替えが行われた。新しい寺院は四月から法事などで少しずつ使いはじめており、今秋、落慶式を迎える予定だ。施主である佐藤 壽朗住職と設計を担当した(株)佐川 旭建築研究所代表取締役・佐川 旭氏にお話をうかがいながら寺院を拝見した。

まず、目を引くのは外観である。御影石を使用した外壁、直線的な窓のデザインは、一見して寺院とはわからないほどモダンな雰囲気だ。一方、屋根には古くから寺社仏閣の屋根に多用される二文字葺きの銅屋根を採用している。

「銅は、年月とともに変化し、渋みを増していく―という印象があります。銅屋根がこれからどんな風に変化していくか、とても楽しみにしています」と佐藤住職は言われる。

この銅屋根にはもうひとつ特長がある。屋根から続く軒下までを銅板で覆っていることだ。佐川氏は、

軒下から銅屋根を見上げる

応接室の
銅の腰壁

本堂入り口の見事な銅屋根

銅製ポスト

硫化処理銅板の室名札

本堂へ続く廊下の天井にも硫化処理銅板が使用されている

ご本尊を引き立てる銅板の背壁

久成寺
佐藤 壽朗住職

「軒下を銅板で覆うことで屋根、軒、壁の境界を曖昧にし、一体感をもたせています。また、普通は屋根材を近くで見ることはできませんが、この納まりだと軒下から見上げたときに屋根の素材感まで感じることができます」と語る。

内装にもさまざまなところに銅が使われている。客殿入り口の室名札は、温かみのある色合いの硫化処理銅板だ。使用しないときにも周囲と自然になじみ、インテリアのような役割を果たす。また、応接室の腰壁にも、硫化処理銅板が使用されている。タイルのように敷き詰められた銅板は、一枚一枚、微妙に模様が違う。渋みのある色合いが、なんとも言えない、落ち着いた味わいを出している。

ご本尊を引き立たせる優しい銅の輝き

「初めて来られた方は、皆さんが驚きます。ご法事のときなどには、ご本尊をじっと見つめている方もおられます」と佐藤住職は言われる。本堂に入ると、金色と黒の須弥壇（しゅみだん）に安置されたご本尊の荘厳な姿が目を引きつける。その背後には、銅壁が柔らかな輝きを放っている。

久成寺では、本堂に安置されたご本尊の背壁にも銅板が採用されている。その輝きが柔らかなのは、ツヤ消し加工された無垢の銅板を使用しているからだという。

「ツヤ消し加工された銅板は、華美でない、控えめな輝きが特長です。人々の生命の力や偲ぶ心を引き出し、そっと吸収するようなイメージを持っています。今回は銅のもつ美しさや尊厳さを感じていただければ、ひとつの素材からも自分の生き方と重ねあわせることができるのではないかと思い、本堂の壁に銅を使うことを提案しました」と佐川氏は語る。

本堂では、檜の柱、金箔貼りの壁、須弥壇の金色と黒、そして銅壁の優しい色合いが一体感を持って溶け込んでいる。住職は、この点が最も気に入っているようだ。佐川氏は、久成寺の設計を振り返り、次のように言われる。

「今回の建て替えは、新しい提案に耳を傾け、受け入れてくださった住職のお人柄と建築家のアイデアがうまくマッチしていたと思います。お寺は心の構築を図る場所です。そういう意味では、建築の中に、住職の寺に寄せる想いを表現することで、想いをずっと先の時代まで飛ばすことができたのではないかと思います」

生まれ変わった久成寺は、明るく開放的で、これまで寺院に描いていたイメージを一新させられる。佐藤住職は、新しくなった寺院を仏事だけでなく、気軽に立ち寄れる、開かれた場にしていきたいと語る。今後は音楽の演奏会など、地域の人々が集まれる行事なども考えていきたいということだ。

銅とともに新たな歴史を刻み始めた久成寺。銅屋根や銅壁は、これからさまざまな人の想いとともに年月を経て、また新たな表情を見せてくれることだろう。

（株）佐川 旭建築研究所
代表取締役
佐川 旭氏

ライトアップが美しい夜の久成寺

写真協力：高橋　学